

祭礼の傘鉾・風流傘 1

―博多松囃子と長崎くんちの傘鉾―

段 上 達 雄

【要 旨】

九州における大規模都市祭礼である博多松囃子と長崎くんちに登場する傘鉾について、その祭礼の概要と共に傘鉾の形態と歴史を明らかにしてゆく。

【キーワード】

傘鉾・博多松囃子・長崎くんち

はじめに

神幸行列に随伴する「傘」には、いくつかの機能が存在する。

① 風流としての趣向

風流とは、風情に富んだ雅なものという意味から始まり、祭礼での山車等に載せる趣向をこらしたさまざまに飾り立てた造り物や練りものの仮装、囃子、踊りにまで及ぶようになっている。大傘の上に、華やかな草花や松樹、造花、季節や時局にあった造り物、それに人形などを搭載して「風流傘」と呼ぶこともある。

② 町印

町の標識。趣向をこらした飾りを搭載した傘鉾を神幸行列に随伴させることが多いが、長崎くんちのように、踊り町の町名や由来をダン（飾り）で表現して、町が目印として傘鉾を用いたりする。町名を書いたものもあり、祭礼町の町印として使用される。大規模都市祭礼の多くが、山車や屋台巡行などの付け祭りを「町」単位で出しており、傘鉾が町印として意識されることも多い。

③ 神霊の依代

傘鉾と名付けられているように、神霊の憑依する神聖な器物として傘を意識していることが多い。そのため博多松囃子の傘鉾のように、事前に「御神入れ」の儀式をすることもある。

④ 宗教的権威等の標識

祭礼において、神社の宮司など宗教的上位者、あるいは神霊の依り憑く尸童（よりまし）としての稚児などに大傘が差し掛けられる。

風流としての趣向、町の標識、神霊の依り代については、それぞれ独立して性格付けされる

ことは少ない、いずれかを強く意識している場合でも、4つの機能が混在していることが多い。

(1) 博多松囃子

① 博多松囃子

福岡市博多区では毎年5月3日から4日にかけて博多松囃子が行われる。馬に乗った福神(福祿寿)、恵比寿(夫婦恵比寿)、大黒などの福の神と稚児が博多の各所を訪問して言祝ぐ祭りである。祝われた側は、返礼に杉原紙1束(10帖)に扇1本を組み合わせた「一束一本」を三方に載せて贈ると共に御祝儀を渡し、清酒、紅白蒲鉾、乾物などでもてなす。現在では昭和35年(1960)から始まった「博多どんたく港まつり」の行事のひとつとなっているように見えるが、本来は博多どんたくの源流であるといえる。

博多松囃子は「福神」「恵比寿」「大黒」「稚児」の4グループによって行われるが、太閤町割り(豊臣秀吉による博多復興)以来の自治組織である「流」^{ながれ}が担当している。「福神」は福神流、「恵比寿」は恵比寿流、「大黒」は大黒流、「稚児」は稚児東流と稚児西流とが受け持っているのである。

「福神」とは福祿寿のことで、その装束は黄絹打掛(茶色の道服)に浅黄色の袴をはき、張り抜きの長頭を被り、福祿寿の面をつける。手に唐団扇を持って騎乗する。子供たちが太鼓を叩いて、福神の「言い立て」を歌いながら福神を先導する。肩衣に裁着袴姿で、白足袋に下駄を履いた男たちが随行して3本の傘鉾を捧げ持つ。

「恵比寿」は夫婦2体の夫婦恵比寿で共に騎乗する。男恵比寿神は緞子の狩衣に紫の袴をつけ、恵比寿神の面をつけて立烏帽子を被り、左脇に大鯛を抱えて釣竿を右手で持つ。女恵比寿神は白の長着に朱の千早を着て緋の袴をはき、天冠を被って女面をつけ、扇を右手に持って珠を抱える。子供たちが太鼓を叩いて恵比寿の「言い立て」を歌いながら先導する。肩衣に裁着袴姿で、白足袋に下駄を履いた男たちが随行して3本の傘鉾を捧げ持つ。

「大黒」は金色の緞子の長着に「大」の字型の文様付きの紺の袴を着用する。黄絹の大黒頭巾を被り、黒漆塗りの大黒神面をつけ、金襴地の沙金袋を背負って右手に小槌を持つ。騎乗する馬の鞍には2俵の米俵を載せる。子供たちが太鼓を叩いて大黒の「言い立て」を歌いながら先導する。肩衣に裁着袴姿で、白足袋に下駄を履いた男たちが随行して3本の傘鉾を捧げ持つ。

「稚児」は舞衣に緋袴姿の少女たちで、天冠を被って中啓(扇の一種)を手に持つ。直垂姿で烏帽子を被って太刀を佩いた少年たちが稚児たちに随伴し、舞いの時に笛・太鼓・鉦で四拍子を奏でる。肩衣に軽衫姿で、白足袋に下駄を履き、「児」の字型を書いた黄色の頭巾を背に垂らした男たちが随行して舞の時に地謡を歌う。稚児流は三福神とは別行程で博多や福岡を巡る。稚児流には傘鉾は随伴しない。また、東流と西流とが一年交代で稚児流の当番となる。

松囃子の準備として、まず2月下旬に松囃子委員寄が催され、6名の町総代と当番町総代(流代表)が集まって予算案の検討や松囃子記念手拭いの図案、松囃子の道順などを審議する。3月下旬の町総代寄に12ヶ町の総代が集まって予算等を審議する。この時期には松囃子基本協議も催され、三福神(福神流・恵比寿流・大黒流)の代表が櫛田会館に集まって三福神の道順や各流内の道順について協議する。4月30日に櫛田神社で「古式傘鉾御神入」があり、3本の古式傘鉾に御神を入れる。各流の当番町は傘鉾を受け取って各町内に持ち帰る。5月1日には「傘鉾御神入」が行われ、当番町で「流傘鉾」と「町傘鉾」に御神を入れる。これによって3本の傘鉾すべてが神聖なものとなる。5月2日は博多どんたく港まつりの前夜祭が、福岡国際センターで催され、町総代たちは松囃子の装束で参加する。

5月3日は松囃子の初日で、各流では午前7時半過ぎに当番町に集合し、記念写真を撮影した後、各町の町総代の家をお祝いして廻る。行列は古式傘鉾・流傘鉾・町傘鉾・騎乗した三福神(福神・恵比寿・大黒)の順である。3流は櫛田神社に集合し、三福神揃ってお祓いを受け、午前9時に「福神」「恵比寿」「大黒」の順で櫛田神社を出発する。博多駅界限、大博通り等を廻り、午後は「博多どんたく港祭り」のパレードの先頭を進み、明治通りの企業等を祝いながら天神地区まで巡行する。その後、築港地域、馬出、福岡県庁などを巡って呉服町ビジネスセンター前で「手一本」を入れて解散し、それぞれの流は当番町に戻り、初日の行事は終わる。

翌日の5月4日は、櫛田神社に集合してから三福神は出発する。天神界限、明治通りの企業を祝って、福岡城跡(城内)を通過して六本松一丁目の護国神社に行き、各町の町総代は拝殿でお祓いを受ける。午後は国体通りを経て、南天神界限を巡り、午後3時に福岡市役所前の広場に設けられた「どんたく本舞台」で記念式典に参加する。三福神は中州界限を祝って廻り、最後は冷泉公園で「手一本」をして解散となる。各流は当番町まで戻り、「手一本」を入れて、松囃子行事を終了する。

5月5日は「計算寄」といって、各当番町では松囃子委員が立ち会いをして、頂戴した祝儀を整理する。また、この日に当番町の人たちが傘鉾を解体する。

5月中旬、面(三福神)や松囃子の道具を当番町から受取町(翌年の当番町)に申し送る。

② 松囃子の傘鉾

傘鉾は棒持型で、柄の途中に肩で担ぐための横棒が突き出ている。松囃子振興会が制作する「古式傘鉾」と流が作成する「流傘鉾」、それに当番町が作成する「町傘鉾」もある。傘鉾の上部には、各流の神様等に相応しい「だし」と呼ばれる作り物が載せられている。

古式傘鉾のだしは、押し絵の美人画がつけられた華やかな羽子板である。流の行列の先頭を進むのは古式傘鉾で、流傘鉾、町傘鉾と続く。傘鉾の傘本体は16本の太い傘骨で構成されて、白い絹布で覆われている。流傘鉾と町傘鉾は直径約1.8m、傘高1.8m(だしを除く)で、傘周囲に黄布で巻いた注連縄風の飾りを巻いてシデを下げ、その下に「小垂れ」という上部が赤で下部が白の幕を巡らせ、その下にぐりと6枚の「大垂れ」を下げる。大垂れは幅約95cm、丈約150cmあり、下部両端に重しとして赤布で作ったサルコを下げることもある。大垂れは正絹の羽二重地の絹布で、書や水墨画等を描いたり、縮緬地に友禅染めを施したものである。古式傘鉾はやや小型で、紅白の小垂れはつかない。

現在の3種の傘鉾が成立するのは比較的新しい。松囃子の写真を観察すると、その変遷が見えて



博多松囃子 大黒流の傘鉾



古式傘鉾の御神入れ

表1 平成20年度松囃子の傘鉾

流		大黒流	恵比寿流	福神流
当番町		須崎町	蓮池町	上魚町
古式傘鉾	だし	羽子板美人	羽子板美人	羽子板美人
	大垂絵	大黒神図	夫婦恵比寿図	寿老人像
		十牛図頌「騎牛帰家」	鷹図	十牛図頌「騎牛帰家」
		風神雷神図	瓢箪から駒図	七転八起の達磨図
		竹図	梅花図	牡丹図
		三番叟図	毛槍と奴図	竹林の仙人図
		書「朝顔カーテン…」	書「お帰りと潮風…」	書「鷹蜂」
流傘鉾	だし	俵上の大黒神像	恵比寿神像	藤花
	大垂絵	山水図	謡曲羽衣図	宝船図（縮緬染）
		山水図	鷹図	宝船図（縮緬染）
		山水図	富士山に波濤	紅葉図（縮緬染）
		山水図	書「静心」（花田勝）	紅葉図（縮緬染）
		親子牛図	書「気力」	書「福神流」（縮緬地）
		牡丹図	書「夢」	書「福神流」（縮緬地）
町傘鉾	だし	三宝上のネズミ像		
	大垂絵	鯉を抱く金太郎図		
		桃太郎・犬猿雉図		
		松樹図		
		牡丹と鶏図		
		書「和 一家の…」		
		書「花下笑山…」		

くる。

大正4年（1915）の「大黒流の集り」という写真によれば、傘鉾上に獅子頭と三つ巴紋の太鼓が載せられている。昭和41年（1966）に撮影された写真には、傘上に竹籠が据えられ、そこに造花が飾られた傘鉾が写っている。この傘鉾上の飾りは時節にあったアレンジも行われ、昭和46年（1971）と昭和47年の写真には、花籠を載せた傘鉾と共に日章旗と星条旗などを立てた傘鉾が写されている。

古式傘鉾は平成3年（1991）に復活したもので、奥村玉蘭が文政4年（1821）に書いた『筑前国名所図会』の「松囃子三福神」という図をもとに復元したものである。

平成20年（2009）の松囃子では、福神流と恵比寿流とは「古式傘鉾」「流傘鉾」をそれぞれ1本、大黒流は「古式傘鉾」「流傘鉾」「町傘鉾」の3本を出していた。

傘鉾の下に立つと無病息災になるといい、子供や赤子を潜らせると丈夫に育つといわれ、博多どんたく港祭りのパレードでは、道路脇の観衆に子供を潜らせることを勧めていた。

博多松囃子の傘鉾は、「傘鉾御神入」によって、依り代としての機能を持つようになる。それと同時に流や町の標識としての役割も持つ。現在のダシ（傘上の飾り）は神像、花、羽子板など、ほぼ固定されている。しかし、垂れには毎年新しい書画が用いられ、風流的要素もかなりある。この三つの要素をバランス良く保っているのが特徴といえるだろう。

③ 中世の松囃子

「松囃子」は正月の松の内に行う囃子という意味を持ち、年頭の祝福芸のひとつで、室町期には盛んに行われていた。松囃子は「松拍子」「松拍」とも書かれる。中世芸能である申楽の一種とも、門付けや風流のひとつといわれる。

『満濟准后日記』には、正平16年（1361）に幼少の足利義満が都落ちした折り、播磨國の白旗城に身を寄せ、赤松則祐が義満を慰めるために披露した芸能を、義満の上洛後に赤松家が毎年正月13日に催すようになったと記している。

博多松囃子の最も古い記録は文禄四年（1595）の『宗湛日記』である。

「文禄四年（1595）十月廿九日朝、名島ニテ、中納言様御振舞、御城ニテ今日博多ノ松はやし仕、懸御目候ヘト、御意ニテ福神多ひす正月ノ如ク仕立テ、御城ニテ懸御目候。御振舞過テヨリ也。御キケンヨクテ錢五十貫文被下候也」と記されている。

博多の豪商であった神屋宗湛が、筑前名島城（現在の福岡市東区名島にあった城）で、城主小早川隆景（小早川秀秋の養父）に、正月と同様に松囃子を仕立てて見せて、大変気に入られ、錢五十貫文を下されたというのである。当然、それ以前から正月に博多で松囃子が行われていたことは間違いなさであろう。しかし、いつから博多で松囃子が始まったかは定かではない。

この時期、西日本各地で松囃子が行われていたようである。例えば、大友家の本拠地であった豊後国府内でも『大友興廃記』に松囃子の記録が出てくる。その詳細な時期は不明であるが、戦国時代末期であろうと推測される。

『大友興廃記』巻一「大友家年中儀式之次第」に次のような記載がある¹⁾。

「元日より三日間まで、府内町より松囃子参る。松囃子とは眉はきたる児多数装束を着し、鞆鼓にて踊る。笛太鼓にて拍子あり」「同十一日府内より松囃子参る。右に同じ。同日上の原より獅子舞参て踊る。獅子の幕金蘭なり。笛太鼓あり」

この松囃子が参上すると、大友宗麟・義統親子は重臣と共に鑑賞し、衣類や金品を下賜するのが習わしであった。

戦国時代末期、大友氏は京都の芸能や行事などを積極的に取り入れていた。大友宗麟は戦国大名として領土を拡大し、南蛮貿易で栄えた豊後府内は繁栄の頂点に達していた。

東京国立博物館が所蔵する紙本着色「月次風俗図屏風」は室町時代（16世紀）に描かれたと考えられ、国指定重要文化財となっている。ここに松囃子の図が描かれている。「月次風俗図屏風」は一年間の各月ごとに行われる年中行事の様子を描いており、第1扇は正月で、「羽根突」「毬打」「松囃子」、第2扇は「花見」、第3扇と第4扇は「田植」、第5扇は「賀茂競馬」「衣更」、第6扇は「犬追物」「蹴鞠」、第7扇は「富士の巻狩」、第8扇は「春日社頭の祭」「雪遊」であるという。

松囃子は第1扇下段に描かれている。画面中央には歳経た松樹の傍らに妻入屋根の玄関らしき建物が建っている。建物の下では横笛を吹き、小鼓、大鼓、羯鼓を打ち鳴らす人々がおり、建物の左側には大太鼓、鉦、鐃鉦を叩く人たちがいる。建物前の広場では多くの人たちが舞い踊っている。



月次風俗図屏風 第1扇下段の松囃子

中には大団扇をかざす者もあり、摺り簞をすりあわせる者たち、さまざまな採り物を持つ人々など、華やかな扮装をした人たちによる群舞である。右手には2つの俵に乗って打ち出の小槌を振り上げる大黒、釣り竿の釣り糸に鯛をつけて踊る恵比寿、金の酒壺を頭上に載せた狸々なども見える。その手前には金色の風呂敷包みを頭上に載せて右手で支え、左手で赤子を抱く福神らしき人物が描かれ、その背後からは幕を巡らせた傘が差し掛けられている。そして差し掛け傘の奥には2基の風流傘が描かれる。左側奥の風流傘の傘上には金色の酒壺の上で舞う狸々の人形を載せる。狸々の人形は右手で金杯、左手に金の柄杓を持ち、右足を上げている。その手前右側の風流傘の上には耳が非常に長い兎形の飾り物を載せている。

ここで最近注目されるのが、井戸美里氏による新しい分析と解釈である。井戸氏はまず「月次風俗図屏風」が近世初頭から周防国岩国領主吉川家に伝来したものであることを明確にした。また、肩衣の描写などから戦国時代末期から桃山時代までを制作年代として提唱しており、後世に記された「道具覚」をもとに、毛利元輝から吉川家（広家）に贈与された可能性の高いことを指摘している。氏は、それぞれの画面を詳細に分析し、「毬打・羽根突」「松囃子」「女の花見」「男の花見」「田植」「賀茂競馬」「呉服屋の店頭」「犬追物」「蹴鞠」「富士巻狩」「春日若宮おん祭」「雪遊」の画面と判断し、特に次の3点を重視しながら、この屏風絵が「月次絵」の範疇を超えていることを考察している。まず、第7扇一面に描かれた建久4年（1193）の富士巻狩を描いているのは、駿河国出身の吉川氏が参加していたため、氏族の由来と名誉を示すものであること。そして第2は、第4扇と第5扇の2面にわたって描かれている田植である。氏はこれを囃子田（大田植）とした。吉川氏は室町期には安芸国大朝を拠点としていた。その吉川氏の旧領地では、今なお「壬生の花田植え」、新庄の「安芸のはやし田」として伝えられ、田植図には吉川氏の統治の記憶が濃厚に込められていると考えられること。第3は「春日若宮おん祭」を描いているのは、藤原姓であった吉川氏の氏族意識によるものであること、などである。

これまで「月次風俗図屏風」が漠然と16世紀の京都の大和絵系の絵師による作品と考えられてきたが、井戸氏は、鎌倉期から中国地方の在地領主となった吉川氏の文化圏内で、戦国時代末期以降に地方絵師によって制作されたと推測していることである。

④ 近世の博多松囃子の傘鉦

博多松囃子における傘鉦の文献上の初出は、『筑陽博多津要録』の寛文8年（1668）4月の福岡藩からの次のような通達である。「松はやし之笠ほこ、金銀のはく、金糸一切つかい申間舗候。勿論諸事軽く可仕候。子供に而も箔置きや金糸の刺繍など一切着仕間式候事」と記されている。これは松囃子の傘鉦の布類には金銀の箔置きや金糸の刺繍などは許されないこと。さまざまなことにお金をかけないこと。稚児などは箔置きや刺繍文様の装束を着てはならないことを通知している。このような通達が出ていることから、逆に当時は傘鉦に用いた垂れ布などに金銀の箔置きや金糸の刺繍が施されていたと考えられる。傘鉦の垂れ布や稚児の装束が豪華で奢侈に流れていると見て、福岡藩はこのような達示を出したものと考えられる。

『石城志』の「巻之六歳事」の項に次のような博多松囃子の笠鉦の記載がある。「三福神の先に笠鉦といふものを作りておのゝ五本宛り持行なり。」「寛文八年（1668）四月、笠鉦、絹にて張事禁止せしめらる。」「むかしは長さ壺丈ばかりに羽子板を作りて、笠鉦の如く持行とかや。いつの頃よりか此事は絶て、今は笠鉦の上に常羽子板をさし侍る也。蓋（ハリギヌ）の下には帯と袋をさげる。」

文政4年（1821）に完成した奥村玉蘭の『筑前名所図会』の「松囃子三福神」と題された絵には、屈曲して進む松囃子の行列を描いている。すやり霞も用いて長い行列を1画面の中に納め

ようとしたのであろう。先頭は5基の傘鉾で、次に騎乗した福神、再び5基の傘鉾、男恵比寿と女恵比寿、その後に大黒が続き、なぜか傘鉾4基(?)が付き従う。その後ろを通りもんの山車が続く。ラフな絵なので、詳細は分かりにくいですが、傘鉾の傘上の飾りとして松の枝や竹の枝と思われるものを載せ、その中央に羽子板を立てている。傘周縁部のネジネジ(注連縄)は表現されておらず、傘の縁には丈の短い幕を巡らせ、長い垂れ布は描かれていない。二基の傘鉾の幕には模様を描いているので、褰をつけてはいなかったことが分かる。傘の下には袋状のものと、下端を折った長い布状のものとを吊り下げているのが見て取れる。『石城志』に「蓋の下に帯と袋を下げる」と記され、『追懐松山遺事』の「松囃子御規定」に「傘ノ下ニハ錦ノ砂金袋鈴トヲサゲ」とあることから、袋状のものは砂金袋、長い布状のものは帯であろうと考えられる。

長い垂れ布とネジネジがないため、現在の傘鉾とは形態がかなり違うように見える。

明治43年(1910)の山崎宗雄『追懐松山遺事』には「松囃子図」が掲載されている。①「正月十五日福神以下福岡御城内ニ至ル松囃子ノ略図 傘鉾五本ノ内」、②「福神 魚町流 又福神流ト云フ」、③「恵比寿 石堂流 又恵比寿流ト云フ」、④「大黒 洲崎流 又大黒流ト云フ」、⑤「兄東町流 呉服町流 西町流 土居流」、⑥「鶴三十三羽ノ内」と記された6枚である。

最初の「正月十五日福神以下福岡御城内ニ至ル松囃子ノ略図 傘鉾五本ノ内」に一基の傘鉾が描かれている。傘上の飾りは、盆栽のような松である。右手には梅のような小さな樹が寄せ植えされているようである。傘周縁部にはネジネジを巡らせて四手を垂らす。短い水引幕を描かず、長い垂れ布は描いている。傘を覆う布も垂れ布も灰色で表現されていることから、白ではなく色付きの布であったと考えられ、模様も絵も書もない無地の布のようである。ただ、この垂れ布は現在のものより幅は狭く、10枚で構成されているものと推測される。これは垂れ布に着尺の布を用いていたためであろう。なお、着尺は長着(足首までである着物)を仕立てるための和服地のことで、幅1尺2寸(約36cm)で、かつては2丈6尺(約7.2m)、あるいは2丈8尺(8.4m)の丈であったが、現在は日本人の身長が伸びたため、3丈(9m)以上必要となり、メートル法の表示では、幅36cmまたは37cm、丈は11.4mとなっている。傘鉾の左右には2人の男がいて、傘鉾を安定させるための曳き綱を握っている。傘鉾の背後には男児4人が太鼓に結ばれた綱を左手で持って右手の撥で叩いており、一人の男児が横笛を吹いている。登場人物いずれも袴を着用して裁付袴を穿き、曳き綱を持つ大人は烏帽子を被っている。現在の傘鉾と比較すると、丈の短い水引の幕をつけておらず、垂れ布の幅が狭い点が違うため、やや様相が異なる。この傘鉾の時期は「福岡御城内ニ至ル松囃子」と書かれているので、江戸末期を想定して描いているのだろう。

(2) 長崎くんち

① 長崎くんちの行事次第

長崎市上西山町の諏訪神社では、毎年10月7日から9日にかけて「長崎くんち」(秋の大祭)が行われる。長崎くんちの行事は6月1日の諏訪神社での「事始神事」から始まる。この日に市中で「小屋入り」が始まり、精進潔斎して祭りに備える。7年に一度奉納踊りを受け持つ踊り町では、夏休みになると、子供たちは奉納踊りの稽古を始める。

長崎くんちの日程は次のようになっている。10月3日には踊り町では「庭見せ」、4日には「人数揃い^{に いそろ}」がある。午前5時に遷御祭、午前7時から諏訪神社前で奉納踊り、午前8時に御旅所^{おおは と}仮宮前で奉納踊りが行われ、続いて市公会堂前広場で奉納踊り、午後1時に神幸行列が大波止の御旅所に渡御し、午後4時には諏訪神社前で奉納踊り、午後5時に市公会堂前広場で奉納踊りが

行われる。8日は「中日」で、御旅所祭典が行われ、午前10時には神社本庁奉幣祭、午後3時から献茶や献花祭等の諸祭典が行われる。10月9日は「お上り」で、午前7時に御旅所前で奉納踊り、午前8時に諏訪神社前で奉納踊り、午後1時には神幸行列が御旅所から諏訪神社に還御となる。

諏訪神社の氏子地域は、山の手の「神輿守町」と町方の「踊町」に分かれている。神輿守町は郷ごとに六分して、神幸の3基の神輿を6年に1度担ぐ。町方は77町あり、七分して7年に1度奉納踊りを担当する。踊町は当番になる3年前に「年番町」といって、その年の諏訪神社の全祭礼と奉納踊りの采配を振る役を担い、御神幸には町内全員が供奉する。

七日朝7時、花火の合図で諏訪神社前の踊り馬場で奉納踊りが演じられる。正面の長坂と呼ばれる73段の石段と広場左右の桟敷は大勢の観客で埋め尽くされる。踊町の「町じるし」である傘鉾がまず最初に登場する。紋付き着流し姿の棟梁が小旗で地を示すと、それに導かれて傘鉾が入場する。傘鉾を囲むように法被姿（または白丁姿）の若者数人が登場し、一人ずつ傘鉾を捧持してくるくと廻る。「フトウ、マワレ」の掛け声がかかり、「モッテコーイ」のアンコールの掛け声もかかる。傘鉾が退場すると「先曳き」といって正装した母親たちが町内の子供たちの手を引いて入場して神前に一礼してゆく。子供たちはその踊町の演目の衣裳を着ている。次に本踊りとなる。本踊りでは日本舞踊や段物といって演劇風の出し物が演じられる。本踊りの地方（お囃子方）は地面に正座して演奏する。本踊りは「ショモウヤレ」とのアンコールの声がかかり、2～3曲演じられる。本踊りの後、「曳き物」と「担ぎ物」が行われる。曳き物には、川船・唐人船・龍船・御座船・御朱印船・阿蘭陀船・南蛮船などの船型の山車と鯨曳きとがある。曳き物を曳く若者たちは「根曳」といい、前進と後進を繰り返した後、横車を押して曳き物を威勢良く回転させる。担ぎ物にはコッコデショ（太鼓山）・鯨太鼓などがあり、龍踊りや獅子舞など多種多様な出し物が演じられる。

② 長崎くんちの傘鉾

長崎くんちの傘鉾はそれぞれの踊町の印としての役割を担っている。傘鉾は、ダシ（出し。傘上の飾り）、タレ（垂れ。傘周囲に垂らした水引幕のこと）、ワ（輪。傘周囲の飾り）で構成され、それぞれの町を表している。本場所道中では、常に行列の先頭に立ち、町内会長以下全員がこれに付き従う。輪は一般にはビロード地の布が用いられるが、神社に関係の深い町では注連縄にしている所もあり、蛇籠あおざしにしている町もある。ただ、船大工町の傘鉾だけは輪がない。竹製の芯棒の下部には青緋2～3本を巻き付ける。青緋とは一文銭を一貫文（銭千枚）を紐で連ねたもので、それを2～3本巻き付ける。これは上部に重心のある傘鉾のバランスを取るためのものである。芯棒には布団を巻いた横棒が差し込んであり、これを肩で担いで下方の握り棒で支えるのである。実際に担いでいる若者に尋ねたところ、下方の握り棒を手前に引くように持つとバランスをとりやすいとのことであった。

傘鉾は全高約3m（ダシを含む）、傘高約2m、直径約2mあり、捧持型の傘鉾としては大型である。傘鉾は重量が百数十kgもあり、それを一人で持つのは極めて困難である。そのため踊町は「傘鉾持ち」と呼ばれる専門家に依頼する。傘鉾持ちには、岩屋組・田手原組・本河内組・三川組・女の都組・柳谷組の6組あり、それぞれ持ち方や傾け方等の技法に違いがある。踊町が7町ある年には、選抜チームが組まれるという。

傘の中心近くに「鈴りん」を吊る。傘鉾を持つ時には鈴を鳴らしながら歩くが、この鈴の鳴らせ方が重要だという。諏訪神社で演じる時に用いる「ねり足」では一歩で一回鈴を鳴らす。「すり足」では二歩で一回、踊町同士がすれ違う時の「かけ足」ではまったく鳴らさない。諏訪神社で傘鉾を

演じる時、最初の3回は「奉納」だという。1回目の大回りとそれに続く小回りは神前に奉納するものといい、4回目からそれぞれの組が伝承する妙技を披露するのだという。

長崎くんちの当番町が出す傘鉾のダシ（傘上の飾り）やタレ（垂れ幕）の趣向を次のように大別することができる。①神社、あるいは神事を表すもの、②町名を洒落て表すもの、③奉納踊りに関係するもの、④珍奇なもの四つである。

神社、あるいは神事を表すものとして、八幡町の傘鉾がある。ダシは弓矢に八幡神の使いである鳩を留ませ、タレは男山八幡宮に白鳩二羽が飛ぶ絵柄、輪は注連縄飾りである。また、上町の傘鉾は、ダシの中心に榊を立て、八脚案に神楽鈴と烏帽子を置いて神楽奉納を意味し、その前に諏訪社縁起一巻を置く。

町名を洒落て表すものとしては、例えば本古河町の傘鉾のダシがある。古川の川を皮に読み替えて、皮を用いた楽器（大鼓と小鼓）を中心に据えて笛を添え、台上の折烏帽子で楽人を表すという趣向である。また、船大工町の傘鉾は、町名に因んで扇や鎗矢2本等の大工の上棟式の儀器類をダシとして飾り、傘部を柿葺きとしている。

奉納踊りに関係するものとして、籠町の傘鉾がある。籠町の奉納踊りの龍踊りに用いる唐楽器（半鼓・銅鑼・喇叭）をダシとして飾り、輪には他に類例のない双龍をつけ、タレは金糸龍を織出した白茶地を用いている。

珍奇なものとしては出島町のダシがある。渾天儀・望遠鏡・羅針盤などの天文用具や洋書を配し、タレは阿蘭陀船を織り出している。

このように長崎くんちの傘鉾は趣向を凝らしたものが多い。風流的な要素が強く、町印としての機能もある。それに対して依代的な性格は弱いのではないかと考えられる。

③ 長崎くんちの傘鉾の歴史

寛永11年（1634）、長崎奉行の援助を受け、諏訪神社初代宮司青木賢清が初めて旧暦9月7日・9日を祭日に定めたのが、長崎くんちの始まりである。寛永19年（1642）長崎市中63町を21町ずつ3組に分けて、3年ごとに交代で踊り町となることが決まる。明暦元年（1655）、奉納踊り町は6年ごとになり、寛文12年（1672）には77町を7年ごとの奉納になる。このような踊り町の発展は、傘鉾などの出し物の趣向が華やかになる要因となった。

長崎歴史文化博物館所蔵の「寛文長崎図屏風」は寛文13年（1673）当時の長崎を描いたものといわれ、最も古い長崎くんちの姿を伝えている。この六曲一双の屏風絵に傘鉾が描かれている。大波止近くのお旅所を出立した行列が諏訪神社に向かうお上りの状況を描写しており、3基の



長崎くんち 大黒町の傘鉾



諏訪祭礼図屏風 右隻五曲目下の傘鉾

傘鉾が描かれている。いずれも四角い台に傘鉾を立て、台の前後に通した棒を男二人で担いでいる。傘上に小さな飾り（ダシ）を載せ、傘自体を5枚の布を重ねて覆っている。傘下には下げ物として華やかな布などを垂らしている。昇山型傘鉾で、現在の一人持ち捧持型の傘鉾と形がまったく違っている。

料亭富貴楼旧蔵で現在は長崎歴史文化博物館所蔵の「諏訪祭礼図屏風」は、八曲一双の屏風で、元禄期（1688～1704）の長崎くんちを描いたと考えられており、合計5基の傘鉾を描いている。右隻三曲目下の傘鉾は、諏訪神社鳥居と鳥居の間に設けられた奉納相撲の土俵近くに描かれ、朱傘の上に載るダシ（飾り）は茶色の軍配で、タレ（幕）は斜め格子文に菊花を交互に入れた地に、大きな丸に橘紋を四方に入れたものである。右隻五曲目上の傘鉾は、諏訪神社の鳥居から出てきた行列の中に描かれており、傘上のダシは銀の三日月型で、タレは朱地に五色の縹緗瑞雲模様が入ったもの。右隻五曲目下の傘鉾は、行列の先頭近くに描かれ、青い傘布で覆った傘上には赤地に白緑巡らせた軍配をダシとして載せ、六方輪違い文様に花紋を入れた幕と、その下に朱地に菊花紋を散らした幕を重ねて下げている。右隻八曲目上の傘鉾は、ダシは桃の実と葉で、傘には白い傘布を被せ、タレは二重で、下のタレは赤無地、上のタレは白地に縹緗模様の六弁の花模様を描く。傘下には五色の短冊を下げている。左隻三曲目下の傘鉾は、お旅所の入口に立てられている。お旅所では阿蘭陀人たちが二階の棧敷席から奉納舞を見物している。傘鉾は薄茶色の軍配をダシとして立て、黒布で傘を覆い、黒地に4段に花紋などを染め抜いたタレを下げている。いずれも1人持ちの捧持型の傘鉾である。「諏訪祭礼図屏風」の傘鉾のダシは単純であり大きくなく、傘周縁部の「輪」は附属しておらず、タレの丈は短い。現在の長崎くんちの傘鉾とは形が違うのである。

長崎歴史文化博物館所蔵の「諏訪神事御供町道行図」は享保年間（1716～36）に制作された二曲の屏風である。右扇上方に諏訪神社、左扇上方にお旅所を描き、長崎くんちの御供町（踊町）の練り歩く様を描写している。それぞれの町の行列の先頭は傘鉾で、右扇には5基、左扇には4基の傘鉾を描く。

- 1) 右扇最上部右側の傘鉾のダシは大きな扇で、傘上に太い赤黒の太綱の輪を四つ置き、黒と赤のタレを2段に下げている。
- 2) 右扇最上部左側の傘鉾のダシは笹に護符を縛りつけたもので、傘上には朱色の太綱を8弁の花のように広げて載せている。タレは灰色のようであるが、途中から下部はすやり霞で隠されている。
- 3) 右扇中部右側の傘鉾は左半分は画面の外になるが、ダシは松の木で、傘上には花卉状に広げた紅白の太綱を載せ、タレは上が土色、下は赤色の幕である。
- 4) 右扇中央やや左下の傘鉾は、四角い団扇状の板をダシとして立て、傘上には五輪の白黒の太綱と赤色の綱をからませた飾りを載せ、タレは黒の上幕と土色地に薄緑の模様の入った下幕を下げる。団扇状の板の中央に白い短冊状に白抜きになっているが、ここはもしかしたら町名を記していたのかも知れない。
- 5) 右扇最下部右側の傘鉾は花を盛った柄付きの竹籠をダシにして、傘上に紅白の太綱を8の字に置き、傘周縁部を紐で繋いでいる。タレは赤の上幕に浅黄色の下幕を下げる。
- 6) 左扇最上部右側の傘鉾はお旅所の一隅に立てられ、天狗の羽団扇をダシにして、傘上には4弁の花状に広げた紅白の太綱を二重に組み、傘周縁部に「輪」のように紅白の太綱を載せる。
- 7) 左扇最上部左側の傘鉾はすやり霞で傘鉾の上部しか見えないが、白い四角い板をダシにして傘上に小さな花卉状の太紐を載せている。

8) 左扇中央右上の傘鉾はお旅所に向かう大薩摩と呼ばれる演し物の先頭を進む。日の出と富士山、それに三保の松原を描いた大絵馬をダシに、傘上には四角く広げた紅白の太綱を四つ載せ、タレは赤色の上幕に緑色の下幕を下げる。

9) 左扇中央下方の傘鉾は町屋が取り囲む敷地内に立てられ、大きな松の木によって本体部分は見えにくい、ダシは丸い白団扇のようで、赤いタレが見える。

大阪府立中之島図書館所蔵の「崎陽諏訪明神祭祀図」は文化11年(1814)頃に作成されたものと考えられている。長崎くんちの神幸行列と年番の町々が出していた奉納踊りなどを詳細に描いており、そこに12基の傘鉾を見ることができる。上巻には諏訪神社踊場の円山町の傘鉾と鳥居前の寄合町の傘鉾、行列中の上筑後町、本籠町、勝山町、万屋町、伊勢町、東濱町ともう1町(詳細不明)の計8基の傘鉾を描く。中巻には行列中の東濱町、八幡町、江戸町、銀屋町、袋町の傘鉾5基を描いている。行列ではすべての傘鉾が神輿よりも先を進んでいる。下巻は神輿を中心とした神幸行列で、傘鉾は描かれていない。

「みゆきの先とも」は傘鉾の画集で、現在長崎県立歴史文化博物館が所蔵している。明治38年頃(1905)頃に諏訪神社神職渋谷江豆に大村町の本多鉄次郎が寄贈したもの、その頃の長崎くんちの傘鉾のダシと輪を詳細に描いている。これと比較すると、寄合町、本籠町、勝山町、万屋町、東濱町、八幡町、袋町などは、形態こそ少し違っているが、趣向は同じである。また、現在の長崎くんちの傘鉾のダシで、「崎陽諏訪明神祭祀図」の趣向と同じものは、籠町(本籠町)の「中国楽器」、東濱町の「蜃気楼」、万屋町の「平樽二組重ね鯉節注連縄連」、八幡町の「朱塗弓立てと重藤の大弓、二十四座の黒斑の征矢、白鳩三羽」である。なお、「崎陽諏訪明神祭祀図」を見る限り、「輪」の多くがビロードで覆ったものと思われ、注連縄は1点だけで、蛇籠は見当たらない。また、

表2 崎陽諏訪明神祭祀図の傘鉾一覧表

	年番町	傘鉾のダシ(傘上飾り)	傘布	輪	垂れ
上 巻	円山町	紫色紅葉、2段の松枝、赤色紅葉(?)	灰色	白色	赤色幕
	寄合町	赤い菊座上に金色の竹籠、斜めに立てた金色の四角い板に町名を記入	灰色	黒色	赤色幕
	上筑後町	赤い竹籠を台上に町名を記した緑色の大きな楓葉	薄茶色	黒色	茶色幕
	本籠町	銅鑼、喇叭、太鼓(羯鼓)等の中国楽器	薄水色	緑色	黒色幕
	勝山町	木枠内の鉦打太鼓に法螺貝を載せる	草色	紫色	黒色幕
	万屋町	町名を記した3個の樽上に注連縄で連結した10本の鯉節を載せる	浅黄色	黒色	茶色幕
	不詳	黒漆塗りの枠型鏡台と大鏡を朱色の網で覆う	薄緑色	注連縄	浅黄色に赤の縞幕
	伊勢町	花車。隅金箔押しの黒漆塗りの曳車に菊と薄の葉を盛った竹製の花籠を乗せる	白色	薄紫色	黄色幕
中 巻	東濱町	蜃気楼。大蛤3個に町名を記し、ひとつの蛤が五重塔を載せた雲を噴出する	緑色	灰色	模様入りの赤幕
	八幡町	矢入れの矢と重藤弓、傘上の2羽の鳩	草色	暗赤色	薄紫色幕
	江戸町	花形の金色台座に町名を記した包紙	草色	赤色	黒色幕
	銀屋町	波濤の上に町名と頭上にひとつの宝珠を載せた龍2頭	薄茶色	黒色	金糸刺繍入り赤幕
	袋町	唐草濃緑色布製の宝袋に朱色の紐結び	薄茶色	灰色	黒色幕

垂れ（幕）は丈が長くなっており、ほとんどの垂れは赤色などの単色である。ただし、東濱町の傘鉾が模様入りの赤地の垂れで、銀屋町の傘鉾は金糸刺繍入りの赤地の垂れである。現在の長崎刺繍や友禅染、紋の織出し、錦、綴織等のような染織技術を駆使した垂れが、当時普及していたわけではなかった。

享保年間（1716～36）に制作された「諏訪神事御供町道行図」の傘鉾の趣向の段階は、町の名や由緒などに因んだダシやタレまで至っていないと考えられる。傘周縁部の「輪」も完成しておらず、5番目や6番目の傘鉾の傘周縁部に載せた太綱は「輪」の原型と言えるのかも知れない。太綱の傘上飾りから「輪」が発達して成立した可能性は高いと思われる。ところが、文化11年（1814）頃制作の「崎陽諏訪明神祭祀図」では、現在のダシや垂れ、輪などの傘鉾の構成要素がほぼ完成しており、ダシの趣向には町ごとの特色が出ている。町名も記され、町標として機能していたことは明白である。享保年間から文化年間の間の約百年間で、現在の長崎くんちの傘鉾の形式が成立していったことは間違いない。他の絵画資料や古文書等の史料の検討をもっと詳細に行えば、その変遷はより明確になるであろうが、それは今後の課題としたい。

④ 博多松囃子と長崎くんちの傘鉾

日本各地の傘鉾や風流傘を見てゆくと、現在の博多松囃子の傘鉾と長崎くんちの傘鉾が兄弟とって良いほど似ていることに気づく。まず、傘上に趣向をこらしたダシ（飾り物）を載せ、傘周縁部に注連縄や輪を取り付けていること、傘周縁部に垂らす幕の丈が長いこと、重い傘鉾を一人で担ぐため、傘の柄に担き棒を取り付けて片方の肩に重量をかけること、傘下に鈴を吊ることなどである。博多松囃子も長崎くんちも、傘鉾の形態は次第に発達してきたことは前述の通りであり、現在の形態に至るまで、相互に影響がなかったとは考えにくい。お互いに影響し合って、現在の傘鉾の形になったと考えるのが自然であろう。

【注】

注1：『大友興廃記』は寛永12年（1635）に佐伯氏の家人であった杉谷氏の一族である杉谷宗重によって記された軍記物で、大友宗麟・義統父子の二代を中心に記述している。

注2：井戸美里『『月次風俗図屏風』の成立と享受に関する一考察 ―旧岩国藩吉川家伝来について―』『文学』第7巻第5号・岩波書店・2006年9・10月。

【参考文献】

『博多松ばやし調査報告書』福岡市文化財叢書第六集・福岡市（文化財保護課）・2019。
久留島浩・原田博二・河野 謙解説『秘蔵！ 長崎くんち絵巻 崎陽諏訪明神祭祀図』長崎文献社・2006。
長崎くんち塾編著『「もってこーい」長崎くんち入門百科』長崎文献社・2011。

表3 長崎くんちの傘鉾

	当番町	演し物	傘 鉾			特記事項
			ダシ（傘鉾上の飾り）	タレ（垂れ／幕）	輪	
① 平成24年踊町	籠 町	龍踊	町名を記した半鼓・本加護満知と書いた銅鑼・喇叭等の唐楽器	白茶地に金糸龍紋を織出す	双龍	
	江戸町	阿蘭陀船	白木鳥居に松と紅葉を配して森崎社を表す	白地の塩瀬羽二重に三社紋の金糸刺繍	注連縄	戦後に復元製作
	魚 町	川船	鯛入りの魚籠・網・葎等のビードロ細工	塩瀬羽二重に三社紋織出し	蛇竜	長崎市指定有形文化財
	今博多町	本踊	中央に町名を記した金幣を立て、三社紋k火焰太鼓と榊と玉垣を配置	塩瀬羽二重に亀甲形と鶴紋を配した几帳型仕上げ。	注連縄	昭和30年に復元製作
	玉園町	獅子踊	朱塗八脚上に烏帽子・神楽鈴・中啓を載せて玉垣を配し、五色絹房の鈴	白地塩瀬羽二重に秋色を藍色で染出した几帳型仕立て	注連縄	旧上筑後町の傘鉾
② 平成25年踊町	栄 町	阿蘭陀万才	源氏物語を描いた貝合せの蛤二枚を紅葉の下に配置	白地の塩瀬羽二重に三社紋入り	ビロード	旧酒屋町傘鉾に戦後の組合せ
	船大工町	川船	紅白の縮緬紐で結ぶ鎗矢二本と扇、掛矢等の大工上棟道具	蝦夷錦	輪はない	傘部は柿葺き
	万屋町	鯨の潮吹き	昔、魚問屋が多かったことから、御祝儀の角樽一對と鯉節一連を飾る	緋色地に長崎刺繍で魚類を表す「魚尽し」文化10年製作。	ビロード	寛政年間（1789～1801）のダシ
	本石灰町	御朱印船	町名を記した楽太鼓、その左右に紅葉を配置	塩瀬羽二重に五色と金糸で三社紋等を刺繍	注連縄	
	桶屋町	本踊	金色の宮殿を鞍上に載せた白象が朱色の台上に立つ。からくり人形	襦袢	ビロード	
	丸山町	本踊	四脚台上に町名を記した円盤を立てる	三社紋	ビロード	寄合町同様に古式傘鉾
③ 平成26年踊町	興善町	本踊	白木八脚台に烏帽子と神楽鈴を載せ、左右に紅葉を配す	塩瀬羽二重に五彩雲と三社紋を金糸刺繍、裾は緋色	注連縄	昭和60年に新調
	八幡町	弓矢八幡祝い船・剣舞	朱塗り矢立に弓一對と矢一揃を立て八幡神の遣いの鳩三羽	高貴織友禅染で京都男山八幡宮の景を表す	注連縄	地元の弓矢八幡宮に由来する
	西濱町	龍船・本踊	町名に因み、紅葉に貝合せの貝桶（石崎融思筆源氏物語絵）二個と蛤	姑蘇十六景図と来舶清人の詩文を染め出す	ビロード	長崎工芸の代表作 長崎名物傘鉾
	万才町	本踊	彫刻家北村西望の「萬歳」と書いた朱盃を中心に、神楽鈴と御幣を配置	塩瀬羽二重に亀甲と鶴紋を金糸銀糸で刺繍	ビロード	昭和60年に新調
	銀屋町	鯨太鼓	町名に因み、銀細工の金色の鯨が口に紫の紐をくわえ、銀の波しぶきが飛ぶ	塩瀬羽二重に男浪を染め出し、金銀のしぶきをつける	ビロード	「流金出世鯉」ともいう
	五嶋町	龍踊	秋の花薄の中に棗形と六角虫籠を飾る	銘酒都菊に因んで菊模様の綴織り。肥塚酒店の寄贈。	ビロード	旧本五嶋町の傘鉾
	麩屋町	川船	麴花の趣向。献上紅白梅と町名を記した麴蓋、古木の根元に熨斗で包む	綴織り三社紋織出し	注連縄	長崎名物傘鉾

	当番町	演し物	傘 鉾			特記事項
			ダシ（傘鉾上の飾り）	タレ（垂れ／幕）	輪	
④ 平成 27年 踊町	諏訪町	龍踊	松樹下に諏訪明神の神紋の梶の葉を置き、玉垣を巡らす	緋色地に白狐と稲妻、鳥居を刺繍	注連縄	市指定 有形文化財
	新大工町	曳壇尻・詩舞	金色の春日燈籠の左右に紅葉を配す	白地の糸錦に金糸で三社紋の織出し	注連縄	
	新橋町	阿蘭陀 万歳	旧町名毛皮屋町に因み、鹿皮を連想する鹿型の香炉を四脚台上に載せる	橋模様を染め出す	ビードロ	長崎名物傘鉾
	賑 町	恵比須船	満珠を表す青い硝子玉を八稜型の朱塗り台上に載せる	金糸青海波織出し地に三社紋を金糸で刺繍		傘鉾本体は 昭和61年に新調
	榎津町	川船	八脚台に掛鯛を載せ、黒塗三社紋蒔絵三宝上に熨斗と御神酒瓶を載せる	羽二重紅地錦織で地紋五色瑞雲に三社紋	注連縄	
	西古川町	本踊	相撲との関係から、軍配・弓取りの弓・相撲放実の巻物	白地塩瀬羽二重に三社紋を金糸で刺繍	ビロード （赤色）	
	金屋町	本踊・ 櫓太鼓	岩上に猿田彦の面を置き、背後に松と菊、左右に鉾と太刀	赤地雲立で杵金襴三丁織	注連縄	
⑤ 平成 28年 踊町	鍛冶屋町	宝船	三条小鍛冶宗近が鎗を下ろすと童子の面相が狐に変わるからくり人形	前日は七福神織出しの綴織、後日は三社織出しの金襴地。	注連縄	旧出来鍛冶屋町の傘鉾
	上 町	本踊	御幣と榊は諏訪社を表し、八脚に烏帽子と神楽鈴、下に諏訪社縁起を置く	塩瀬羽二重に旭と雲の曙模様入り	ビロード	旧東上町の傘鉾
	油屋町	川船	白木の三宝に稲穂と長熨斗を載せて金色宝珠の熨斗押を載せる	前日は塩瀬羽二重に三社紋の金糸刺繍。	注連縄	
	筑後町	龍踊	岩に金銀藍白の玉を載せ、八脚の鹿角に草薙剣を掛け、八咫鏡勾玉を下げる	赤地塩瀬羽二重に銀糸の波と金糸の鯛の刺繍入り。	注連縄	戦後に新造
	元船町	唐船祭	「大波止のテッポウタマ」に錨と鴈3羽	亀甲形織出しの都錦に萬才の崩し字紋	ビロード	
⑥ 平成 29年 踊町	東濱町	竜宮船・本踊	蛤から吹き出す汐の中に金色三層の蟹気楼が浮かぶ	緋色塩瀬羽二重に金糸の青海波。後日は珊瑚海の幕	ビロード	
	銅座町	南蛮船	銅銭三枚	糸錦に金糸で御前御簾織出	注連縄	昭和63年 （昭和49年）製
	築 町	御座船	町名の築を読み替えた「月」を松の下に配し、月の下に秋草を配す。	紅白光琳菊を織り出した綴織り	注連縄	
	八坂町	川船	ビードロ細工の青松と紅葉下の神明造白木鳥居と玉垣で八坂社を表す	白地塩瀬羽二重に三社紋の金糸刺繍	注連縄	
	馬 町	本踊	鞍・轡・手綱・騎馬笠・弓矢・鞭・下鞍2枚（みの亀と町名刺繍）等の馬具	萬字くずし地紋に柏と雲の織出し（京都神坂雪佳下絵）	ビロード	弘化年間 （1844～48）製の 墨書

	当番町	演し物	傘 鉾			特記事項
			ダシ（傘鉾上の飾り）	タレ（垂れ／幕）	輪	
⑦ 平成 30 年 踊 町	大黒町	くんち舞・唐人船	高麗縁の台上に金の打出小槌と白鼠を配し、かげ大黒といって大黒様を表す	緋色の塩瀬羽二重に魚尽しの友禅染	注連縄	
	出島町	阿蘭陀船	天文用具・洋書等と出島出入りの門鑑	阿蘭陀船と波雲の刺繍	ビロード	昭和28年に新調
	本古川町	御座船	古川の川を皮に読み替えて、大鼓と小鼓、笛等の楽器の前の台上に折烏帽子	白地塩瀬羽二重に源氏雲楓ちらし、楽太鼓等を描く	注連縄	
	東古川町	川船	ビードロ造りの投網を櫓にかけ、町名を記した魚籠、蟹、芦、川骨を配す	濃納戸地に宝尽し、荒格子の織出し、緞子	蛇籠	
	樺島町	太鼓山	（コッコデショ）猿田彦面と御幣と榊	塩瀬羽二重に磯辺の松と岩と波の染め	注連縄	昭和57年に旧態を模して製作
	紺屋町	本踊	冠台上に楽人の鳥兜と笙を置き、左右に紅葉を配置する	白地糸錦地に古代模様と玉色糸錦 に三社紋織出。	注連縄	
	小川町	唐子獅子踊	芦の中の櫓に投網を掛け、鷺二羽を配す	雲に鳳凰織出しに三社紋を金糸で刺繍	蛇籠	

※それぞれの踊り組の通称は、①八尋会、②神清会、③七和会、④常盤会、⑤清明会、⑥昭平会、⑦北斗会という。

表4 長崎くんちの傘鉾（現在見られない傘鉾）

当番町	傘	鉾	輪	特記事項 (出演中止時期)
	ダシ（傘鉾上の飾り）	タレ（垂れ／幕）		
① 古 町	堆朱印籠に珊瑚の緒締、唐獅子の根付けに町名を記した紫印伝の巾着	白地に藤の写生図の友禅染	ビロード	昭和30年から
① 桜 町	町名に因み、桜の下に「天莫空勾銭」の詩を記す児嶋高德が立つ	白地塩瀬羽二重に三社紋の刺繍	注連縄	昭和8年から
① 勝山町	町名が長崎氏の勝利に因むため、陣太鼓・采配・法螺貝等の戦道具を配置	前日の幕は猩々緋 後日の幕は三社紋入り	ビロード	昭和8年から
② 出来大工町	鈴50を懸けた大々神楽の白木棒と町名を記した台を紅白縮緬で結び、鳥居と御幣を立てる	白地の塩瀬羽二重に神境の景色を染め出す	注連縄	
② 大井手町	中島川の大井手に因み中央に水堰を据え、左右に杜若と川骨、鷺二羽を配す	前日の幕は亀甲菱の中に三社紋を織出す	蛇籠	昭和24年から
④ 磨屋町	町名に因み、刀研道具・古刀銘鑑・刀匠烏帽子・粟田口吉光の白鞘一口を配す	糸錦地に牡丹と芍薬を織出す	ビロード	昭和5年から
④ 本紙屋町	町名に因みビードロ細工の紙漉用具を堰に置き、左右に杜若と芦を配す	白地塩瀬羽二重に秋葉模様	蛇籠	昭和5年から
⑦ 伊勢町	榊古木の前に白木神明鳥居と白鷄二羽を配す	二見浦夫婦岩に日の出の図	注連縄	昭和36年から
⑦ 八百屋町	目貫箱に黄金造りの龍の目貫と小柄など	白地塩瀬羽二重に三社紋を刺繍	ビロード	昭和8年から
⑦ 炉粕町	銅銭三枚(同町に居住した唐通事呉氏の古銭趣味に因み文政年間に竹雲が図案作成	前日の幕は竹雲筆の芦雁の図。 後日の幕は三社紋。	ビロード	昭和8年から
寄合町	金色の菊座に町名を記した神代鋒と熨斗に包んだ菊花と薄	糸錦友禅染に刺繍を加えた松板目	ビロード	文政年間作の墨書銘あり
今下町	長熨斗を立て、金色の宝珠で押さえとする	紅白の緞子に三社紋を金糸で刺繍	注連縄	昭和7年から
内中町	町名を記した朱塗りの大盃の左右に菊花	塩瀬羽二重に三社紋織出し	ビロード	昭和8年から
西上町	玉垣と梶の前立ちの兜の左右に榊を配す	不明	注連縄	昭和36年から
本大工町	刀の鍔と鍔箱	武田信玄の武具の織出し	ビロード	昭和23年から
引地町	南画文人趣味の筆筒・硯屏・印材等を配す	白地塩瀬羽二重に四楽の図を描く	ビロード	昭和17年から
本紺屋町	八脚に立烏帽子・中啓・神楽鈴を載せ、後ろに榊古木を配す	白地塩瀬羽二重に三社紋を金糸で刺繍	注連縄	昭和9年から
本興善町	町名を記した簞に矢一揃、左右に紅白梅	白地塩瀬羽二重に金糸刺繍三社紋	ビロード	昭和9年から
台場町	大小二株の松と大砲、旭日旗を掲げ鳩二羽	浪模様と神紋か？(大正15年加入)	注連縄	昭和8年から
材木町	岩上に烏帽子・釣竿・鯛入りの魚籠、松	現在、賑町で使用中	注連縄	昭和9年から
浦五島町	冠台に烏帽子・直衣・中啓を載せ、左右に松を立つ	日本三景織出しの綴織り	注連縄	昭和3年から
袋 町	四脚の折敷に蜀江菱金襴の宝袋と宝珠、鼠	雲中かりん織出し	注連縄	昭和10年から
船津町	白帆の左右に杜若等を配す	猩々緋羅紗に水車と水鳥の刺繍	蛇籠	昭和11年から
今 町	雲脚台に絵扇二本を載せ、下に黒漆塗扇箱	曙ぼかしの塩瀬羽二重を几帳仕上	注連縄	昭和5年から

当番町	傘	鉾	輪	特記事項 (出演中止時期)
	ダシ（傘鉾上の飾り）	タレ（垂れ／幕）		
平戸町	紅葉の下に銀の御幣を立てて玉垣を巡らす	糸錦亀甲地紋に三社紋を織出し	注連縄	昭和11年から
玉江町	岩上にテッポウタマ（大砲の弾）に鶴を配す	白地塩瀬羽二重に老松を描く	ビロード	昭和5年から
東中町	町名を記した金色串団子左右に櫛を立てる	塩瀬羽二重に三社紋を金糸刺繍	注連縄	昭和6年から
本博多町	老松の下に金色方形の燈籠を据える	緋塩瀬羽二重に三社紋の織出し	注連縄	昭和11年から
大村町	町名を記す金色の串団の左右に櫛を立てる	白地塩瀬羽二重に三社紋を刺繍	注連縄	昭和5年から
下筑後町	黒漆塗の泊木に鷹、下に狩笠と矢を配す	立湧の雲と波野織物	ビロード	昭和6年から
豊後町	梨子地の面箱に御幣を立て、お多福面・神楽鈴・檜扇を配す	三社紋に裾ぼかしか？。詳細不明	ビロード	昭和6年から
本下町	楠公親子の桜井の別れ	ビロードに嵐山・宮島・金閣寺	注連縄	昭和35年から
今鍛冶屋町	葉罐	三社紋。詳細不明	注連縄	昭和42年から
外浦町	岩上に金烏帽子・浪を描いた潮汲み桶一荷、大小の松を配す	白地塩瀬羽二重に浪千鳥を織出し（原爆で焼失）	注連縄	昭和6年から
西中町	鎧櫃を据え、七星の軍扇と太刀と矢を配す	菊桐模様白地緞子に三社紋を刺繍	注連縄	昭和6年から
眼鏡橋町	源氏物語の貝合せは栄町で使用。袋町と酒屋町が合同製作	詳細不明	ビロード	戦後～昭和31年まで出演
今籠町	波が揺れて巖上の鷹が羽ばたくからくり	白茶色錦地亀甲紋織出し	蛇籠	昭和6年から
恵比寿町	烏帽子、鯛、釣竿を配置して恵比須様を表す	塩瀬羽二重に浪模様を染め出す	注連縄	昭和8年から

東中町・本博多町・下筑後町・外浦町・大村町の傘鉾は原爆で焼失。

中町・梅ヶ崎町・広馬場町・八千代町の傘鉾については詳細不明。